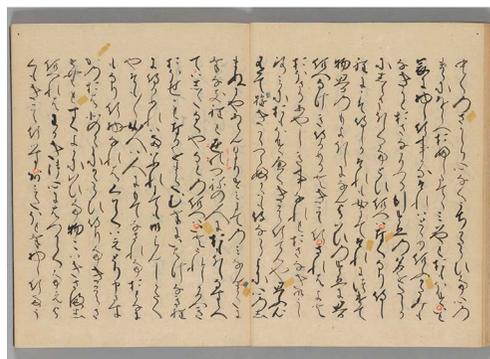


図書館だより

目次

貴重書の活用	——坂本 清恵	1
著作紹介 篠原聡子著『アジア・コモンズ—いま考える集住のつながりとデザイン』	——篠原 聡子	2
著作紹介 佐藤和哉著『〈読む〉という冒険：イギリス児童文学の森へ』	——佐藤 和哉	3
ケルムスコット・プレス版『ユートピアだより』	——川端 康雄	4
図書館エントランス展示紹介「フィクションの中の感染症」	——濱口 都紀	6
カウンターでよくある質問—新学期編—	——関覧係	7
図書館からのお知らせ	——濱口 都紀	8



日本女子大学図書館蔵「源氏物語」『わか紫』より

貴重書の活用

坂本 清恵

開学120周年（2021年4月）事業の先駆けとして、2019年にいち早く竣工した新図書館は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、しばらく利用が困難な状況にありましたが、この4月から、学内者のみという制約はあるものの、本来の役割を果たすことが可能となりました。コロナ禍の中でも、図書館が構築してきたオンラインデータベースや eBook の拡充、書籍の郵送貸出などを行い、また大学院生の協力を得たラーニング・サポーターのオンライン相談、オンラインミニ講座など充実した活動も行いました。そこで新たな図書館活用法を身に着けた方も多かったと思います。

とはいえ、図書館の醍醐味は、本を直に手にとるところにあります。創立60周年記念に際し、図書館開設に対する上代タノ先生の強い思いのもと建設された旧図書館は、自分で本を選べる開架式図書館でした。妹島和世氏の設計により、2022年日本建築学会作品選奨に選ばれた新図書館も、集密書架部分ではありますが、未知の本との遭遇が可能な開架式であることは、学生の皆さんに、創立者成瀬仁蔵の提唱する「自学自動」の精神を体現できる機会を与えることと考えます。

しかし、すべての本が開架されているわけではありません。貴重書室や和装本室に厳重に収められている典籍類もあります。そうした資料を閲覧する場合、所定の手続きはもちろん、書誌学の基礎知識が必要となります。しかし、こうした貴重書に触れることも、大学で学ぶ学生にとって、大切な体験となります。例えば、文学部日本文学科の授業では、泉会の寄付により図書館の所蔵となった、桃山時代書写の『源氏物語』五十四帖揃い本を、直接手に触れ、書写された時代の息吹きを感じながら研究を行うことができます。上掲写真の「わか紫」では、「猶」とあるべきところが「名を」とされる、桃山時代ならではの仮名遣いに基づいた解釈がなされていることが分かります。活字となり、校訂された本文を読んでいるだけでは知ることのできない、それぞれの時代の生々しい読みに触れることができるのです。それは、「見ぬ世の人を友として」楽しむのみならず、残された資料から豊かな情報を引き出し、新たな学術的知見を獲得する端緒ともなるのです。

図書館はただ資料を保存するところではなく、それを公開し、共有することで、研究と教育に貢献する役割を担っています。日本女子大学が、図書館やそれぞれの学科において、時間をかけて蓄積してきたこれら貴重本を広く活用できるよう、デジタル公開を目指す課題が、今まさに喫緊のものとなっています。

（図書館長・日本文学科教授）

著作紹介

篠原聡子著『アジアン・コモンズ—いま考える集住のつながりとデザイン』

篠原 聡子

ホーチミンには、今でも、ヘムと呼ばれる路地が多く残っている。このヘムに沿って、チューブハウスと呼ばれる間口が狭くて奥行きが長い3階から4階建ての住宅が並ぶ。一階は、店舗やオフィスであることも多い。そこに朝6時過ぎくらいから10時くらいまで、幾つもの屋台が出て、ヘムはそれ自体が食堂のようになる。ベトナムの麺料理フォーや、バインミーと呼ばれるフランスパンでできたサンドイッチなどが売られていて、あちらこちらに小さなテーブルや椅子が出て、屋台で買ったご馳走を食べる。ヘムには、狭いチューブハウスから結婚式や葬式がはみ出してくることもある。ヘムは、一義的には通路であるが、それ以上に生活空間であり、ヘムに暮らす人々にとってのコモンズである。しかし、人が集まって暮らせば、常にある種の豊かさを持ったコモンズが発生するとは限らない。特に、短期間につくられた集合住宅団地のような空間は、こうした自生的コモンズとは最も遠い空間であるように思っていた。

そうした考えを根本的に変えたのは、バンコクのディンデン団地との出会いであった。真っ白で繊細なフリーズソレイユ（日除け）に覆われたファサード、一階はピロティで、ふわりと持ち上げられたボリュームからなる構成は、ヨーロッパ発のモダンハウジングのお手本のようなデザインの集合住宅団地であった。しかし、足下のピロティを見回せば、すっかりと屋台やスモールショップに埋め尽くされており、4棟の辻には、ヒンズーの神をまつた社があり、タイの街そのものである。ディンデン団地は、モダンハウジングの無味乾燥な清潔さの代わりに、一見雑然としながらも人々の活気に満ちていた。それは、デザイナーとしては、大変に衝撃であったし、計画の存在意義そのものが問われるようにも思えた。結局、何を計画しても住人のタフネスの中に飲み込まれてしまい、それは計画したものよりずっと生き生きしているのではないかとさえ思えた。現実の前で混乱した時は、図面に整理するに限る。平面図という抽象的なプラットフォームに、住人による建築空間へのカスタマイズを書き込んでいくと、そこにただ眺めているだけでは発見できない構成が見えてくる。雑然と見える現実にも、実はそれなりの秩序があり、それらは建築のデザインとも、少なからず関係していた。住人によるカスタマイズを誘発する空間もあれば、なにも起こさない空間もある、のである。

このディンデン団地との出会いは、本著をまとめる重要な契機となった。住人のコモンズにおける豊かな住みこなしの観察から、ふたたび建築のデザインにフィードバックできる手がかりをつくらうというのが、この本の主要な目的である。したがって、当初は、ディンデン団地のような都市の急激な人口流入に対処するために作られたモダンハウジングのみ対象としていたが、ヘムや胡同のような伝統的な都市空間の中のコモンズにも、同様に着目をして調査をした。作られた目的も、時期も、住んでいる人も異なるが、それでも人が集まり、その場所に愛着をもって暮らしている場所には、何等かの似たような様相が見られた。そして、それは、モダンハウジングに引き継がれている点が多量にあった。また、各都市で、比較的新しい集合住宅、いわゆるコンドミニウムも取り上げることとした。それは、若干の批評の意味もありながら、それでも市場原理を超えて、住みこなされた空間を発見したいという思いもあったし、計画者としての私たちが、今後、直接関わる可能性がある題材であろうと考えたからである。その結果は、本著を手にとっていただければ、と思う。本著は、1部のこうした都市の集住空間の観察と、2部の対談、3部の計画へとつなげるデザイン手法の解説からなっている。最後のデザイン手法にいたるまでの、大いなる遠回りを楽しんでいただけたら、幸いである。

(学長・住居学科教授)

2021年10月 平凡社発行 361頁 *図書館目録所蔵、請求記号518.8-Shi



著作紹介

佐藤和哉著 『〈読む〉という冒険：イギリス児童文学の森へ』

佐藤 和哉

今さら言うまでもありませんが、本学の文学部は、日本文学科、英文学科、そして史学科で構成されています。これは、奇しくも、高校までの教科でいう、国語、英語、社会とゆるやかに対応しています。岩波ジュニア新書の1冊として、「イギリス児童文学を題材として、文学的テキストの読みかたを若い読者に語る」という企画をまとめているときに念頭に置いていたのは、実は、このような本学の文学部のありかたでした。

今、あらためて、編集部提出した企画書を見ますと、「人文知軽視の風潮が漂う現在だからこそ、文学作品を「読む」ことの豊かさを伝えたい」としたうえで、「国語＝日本文学科」の観点からは、『中学・高校での国語』の読み方にとどまらない文学的テキストとの向き合い方の可能性を扱い、「英語＝英文学科」からの視点としては、言葉遊び、ユーモアなどの要素や異なる文体の効果によって「外国語学習の持つ可能性や面白さ」を語り、さらに「社会＝史学科」との関連では、「社会・文化史の重要性を示すとともに、文学作品の読みかたとの関連」について考える、と企画の意図を説明しています。本書、『〈読む〉という冒険－イギリス児童文学の森へ』は、こういう企画で書かれました（三点めは、史学科の学びと直截的には結びつかないように思われるかもしれませんが、後ほど触れますように、本の内容には歴史的な事項をかなり含むこととなりました）。

高校までの国語教育が、相変わらず「作者はこの作品で何を意図したか」を問うことに終始しているように思われるのに対して、本書では、「インターテクスチュアリティ」や「新歴史主義」といった考えかたを理論的な立ち位置としています。何やら難しげに聞こえますが（実際、理論的に突き詰めると難解ではありますが）、極端に単純化して言えば、どんなテキストも、それが書かれた時代に存在していたほかのテキストと互いに関連しあいながら存在しているので、その相互の関連を意識しながらテキストを読み、そうして見えてくる「テキスト」と「歴史」のお互いの関係について考える、といった視点のことです。これが、この本に一貫する姿勢です。

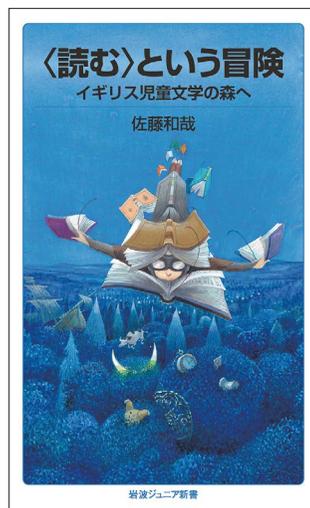
このような関心のもとに、本書では、マザー・グースと子どもの歴史性、『ロビンソン・クルーソー』と奴隷貿易、『クリスマス・キャロル』と児童労働や貧困、『不思議の国のアリス』と近代の時間観念、『クマのプーさん』と第一次世界大戦、『ライオンと魔女』と善悪二元論、そして、『第九軍団のワシ』とイギリス帝国の陰り、というような内容を扱っています。

それから、イギリス児童文学について扱った本にしては意外かもしれませんが、本書には、核兵器とか、Colaboとか、ニューヨーク同時多発テロとか、アメリカ軍のアフガニスタン撤退とかも出てきます。このような話題がなぜ出てくるかという、この本でもう一つ示したかったことが、児童文学に限らず、「文学」が持つ「言葉の力」が、分断の進む現代においていかに重要であるか、という点だったからです。若い読者の方々に対するメッセージとして、文学作品を読むことの政治性、社会性といった論点を示したかったということもあります。

以上、「作者の意図」ばかりを書き連ねましたが（本書の立場と矛盾しますが、この文章は文学的テキストではありませんので…）、これがどこまで伝わっているかは、実際にお読みいただいて、それぞれご判断いただくしかありません。

（英文学科教授）

2022年2月 岩波書店発行（岩波ジュニア新書947） 238頁 *図書館目録所蔵_請求記号909-Sat



ケルムスコット・プレス版ウィリアム・モリス『ユートピアだより』

川端 康雄

ケルムスコット・プレス（以下、KPとも略記する）の全53点の書物中、ウィリアム・モリス自身の（翻訳書をのぞく）著作は14点ある。そのなかでもっともよく知られるものといえば『ユートピアだより』であることは論を俟たない。フルタイトルは『ユートピアだより——もしくはやすらぎの一時代、ユートピアン・ロマンスからの幾章』（*News from Nowhere: Or, an Epoch of Rest, Being Some Chapters from a Utopian Romance*）。初出はモリスが1884年暮れにエリノア・マルクス、B. バックスら同志たちと結成した社会主義同盟(The Socialist League)の機関紙『コモンウィール』（*The Commonweal*）に1890年1月11日号から10月4日号まで毎週連載したもので、それに加除修正して単行本化した通常の版がロンドンの書肆リーヴズ・アンド・ターナー社から1891年3月に（書誌学者のバクストン・フォーマンによれば3種の版で）出された。KP版はその3種の単行本のいずれかを底本として著者が数箇所修正して刊行したものである。その書誌データは以下のとおり。

KP 書目第12番『ユートピアだより』（*News from Nowhere*）ウィリアム・モリス著。8折判（205×140mm）、320頁。ゴールドデン・タイプ。2色刷。木口木版口絵C. M. ギア画。軟ヴェラム装、絹紐付。紙刷本300部（2ギニー）。ヴェラム刷本10部（10ギニー）。コロフォン日付1892年11月22日。リーヴズ・アンド・ターナー社より1893年3月24日発売。

『ユートピアだより』のあらすじを簡単に述べておくと、19世紀末のロンドンに住む社会主義者のウィリアム・ゲストという人物がある朝目覚めると社会体制が様変わりした未来（おそらく22世紀）のロンドンに入り込み、その住人に新世界の暮らしぶりについて説明を受け、テムズ川をボートで遡ってコッツウォルズ丘陵のケルムスコット村まで旅をし、最後に夢から覚めて旧世界にもどる、という話である。語り手のゲスト（客人）氏はモリス本人を彷彿とさせ、19世紀の社会体制に批判的でありながらもその慣習が染み付いて離れない彼が新世界の新しい流儀に慣れず戸惑いつつも称賛の念を覚える。社会革命が起きて大分経つロンドンには、大工場や鉄道や鉄橋など、近代産業の産物が消えていて、テムズの川の汚染は浄化されて鮭が遡上するほどになり、森がふえ、石造りの建物は装飾がふんだんに施されて優美で、ジェフリー・チョーサーが生きていたころの中世のロンドンを思わせるような町になっている。貧富の差もなく、苦役となる仕事もなく、貨幣経済さえも廃棄されている。モリス商会でのデザイン制作の長年の実践と、1870年代後半以降のコミットメント（反戦運動、古建築物保護運動、そして社会主義運動）と、両面での活動の経験をふまえての、あらまほしき社会についてのモリス自身のヴィジョンの提示がこの物語においてもっとも説得力をもってなされており、これが多方面で後世に及した影響は大きなものだった。日本語訳も複数あり、初訳は堺利彦が『理想郷』と題して1904（明治37）年に平民社から刊行している。いちばん新しい訳として岩波文庫版の拙訳（2013年刊）がある。

モリスがこの物語を『コモンウィール』に連載していた1890年は、折しもケルムスコット・プレス設立に向けて着々と準備を重ねていた時期であった。それゆえ、これをKP刊本に加える計画は当初からあった。連載終了の翌月の1890年12月にモリスの妻ジェインはW. S. ブラント宛の手紙でその計画について言及している。長女ジェニー宛の1892年6月21日付の手紙でモリスはKP版の印刷を進めていることを告げている。しかし口絵（物語後半部の、テムズ川を遡る旅の目的地であるケルムスコット村にあるモリス自身の別荘ケルムスコット・マナーの外観を描いた1頁大の木口木版挿絵）の制作が遅れたために年内には刊行できなかった。それで上記の書誌データにあるように、コロフォン日付と発売日に4カ月のタイムラグが生じることとなった。

いまから見ればこの口絵を欠いたかたちなど考えられないのだが、これを入れるのを決めたのは意外にも印刷作業がかなり進んでからのことで、モリスの秘書シドニー・コッカレルの提案だった。1892年10月17日付のコッカレルの日記に『『ユートピアだより』の口絵として〔ケルムスコット・マナーの〕家の絵を入れてはどうかと提案したところ、WM〔モリス〕はその案をお気に召したよ



ウィリアム・モリス著『ユートピアだより』（ケルムスコット・プレス、1892年）の見開き2頁。口絵（C. M. ギア画、W. H. フーパー彫版）と冒頭頁。活字、ボーダー、装飾頭文字のデザインはモリス（所蔵：日本女子大学図書館）

うだ」と記している。そのあと同日記に「WMはケルムスコットに赴き、『ユートピアだより』のための家を描いているギアと会った」（1893年1月24日付）と記されている。口絵の案が遅れて出たものではあれ、その制作のため入念に準備をしていたことがうかがえる。地元産のコッツウォルド・ストーンで建てられたその古屋はモリス自身が大いに愛し、創作のインスピレーションを得た建物であり、物語のなかでも重要な役割を担わされている。ちなみにこの建物は現在[ロンドン好古協会](#)の管理により室内外とも一般公開されており、この挿絵とほぼ変わらぬ姿をいまでも保っている。私自身何度か訪問しており、最後に訪ねたのは2019年夏、モリス協会主催でロンドン、ハマスミスのモリス旧宅（ケルムスコット・ハウス）からケルムスコット村まで5日間かけてテムズ川をボートで廻行する[ツアー](#)に参加した際のことだった。

KP本特有の黒々とした本文の印字に赤インクによる肩標題、本文注がアクセントを付けている。なかでも肩標題は、冒頭ページと最終ページをのぞくすべてのページに「明日は新たな日」「労働の報酬」「仕事不幸ならどこに幸福がある？」など、そのページを要約するような文言がモリス自身によって付されている。拙訳でこれを訳出して入れたかったところだが、製作上難しく、断念した。しかし翻訳作業でこの肩標題は有益だった。たとえばテムズ川廻行の旅のなかで「美しい土手」と本文にあるだけなのが、肩標題に「ハローデン・ヒル」と赤字で記されているなど、本文中に明記されていない地名がそこに記されている。それ自体がモリスによる物語の補注になっていて、普及版にない情報が加えられている。他のKP本の例にもれず、これも原本は古書市場で高額だが、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館が比較的安価な[複製版](#)を出しているので、お勧めしたい。（英文学科教授）

図書館エントランス展示「フィクションの中の感染症」

濱口 都紀

2022年度の開館初日である4月2日より5月末まで、図書館エントランスにて「フィクションの中の感染症」と題した展示を行った。久しぶりに登校し、日常を取り戻しつつある皆さんにとってあまり気持ちが盛り上がる内容ではないかもしれない。しかし過去の人類が、感染症という災害にどう対峙してきたかを扱う文学作品に触れることで、私たちが2年以上苦しめられている現在の状況を、また異なった視点で見るヒントになるのではないかと思う。

なお、展示の候補となる資料を探す過程で、今回展示しなかったもの、当館で所蔵していないものも含めたささやかなリストを作成した。もとよりジャンルを網羅するものではないが、このようなテーマに興味を持った方のお役に立つことがあれば幸いである。

もっと読んでみたい人のための「感染症文学」ブックリスト（※印は今回展示したもの）

ベスト

※ 『デカメロン』 ジョヴァンニ・ボッカッチョ著、平川祐弘訳、河出書房新社、2012	973/Boc	図目集密
※ 『ベスト』 A. カミュ著、宮崎嶺雄訳、(カミュ全集 第4巻) 新潮社、1972	958/Cam/4	図目集密
※ 『ベストの記憶』 ダニエル・デフォー著、武田将明訳、(英国十八世紀文学叢書 第3巻)、研究社、2017	933.6/Eik/3	図目
『カンタベリー物語 全訳』 チョーサー著、笹本長敬訳、英宝社、2002	931/Cha	図目集密
『いいなげ：17世紀ミラーノの物語』 アレッサンドロ・マンゾーニ著、平川祐弘訳、河出書房新社、1989	973/Man	図目集密
※ 『騎士バツンピエールの奇妙な冒険』 ホーフマンスタール著、小堀桂一郎訳 (ホーフマンスタール選集 第2巻)、河出書房新社、1972	948/Hof/2	図目集密
『ドゥームズデイ・ブック』 コニー・ウィリス著、大森望訳、早川書房、1995		所蔵せず

コレラ

※ 『秘密の花園』 F.H. バーネット著、猪熊葉子訳、(福音館古典童話シリーズ24)、福音館書店、1986	909.3/Fuk/24	図目集密
※ 『ヴェニスに死す』 トーマス・マン著、高橋義孝訳、(トーマス・マン全集 第8巻)、新潮社、1971	948/Man/8	図目集密
『さまよえるユダヤ人』 ウージェーヌ・シュエ著、小林竜雄訳、角川書店、1951	953/Sue/1, 2	図目集密
『胡蝶の夢』 (司馬遼太郎全集 第40, 41巻) 文藝春秋、1983	918.6/Shi/40,41	西保存書庫
『コレラの時代の愛』 ガブリエル・ガルシア・マルケス著、木村菜一訳、新潮社、2006		所蔵せず

肺結核

※ 『椿姫』 デュマ・フィス著、永田千奈訳、光文社 (光文社古典新訳文庫)、2018	953.6/Dum	図目
※ 『ラ・ボエーム』 H. ミュルジュール著、辻村永樹訳、光文社 (光文社古典新訳文庫)、2019	953.6/Mur	図目
※ 『風立ちぬ』 (堀辰雄全集 第1巻)、筑摩書房、1977	918.6/Hor/1	図目集密
※ 『不如帰』 徳富蘆花著 『明治の古典：カラーグラフィック』 第5巻、学習研究社、1989	O.S./910.26/Mei/5	図目
『魔の山』 トーマス・マン著、高橋義孝、滝沢弘訳 (トーマス・マン全集第3巻)、新潮社、1972	948/Man/3	図目集密

疱瘡 (天然痘)

※ 『夜長姫と耳男』 坂口安吾著 (坂口安吾全集 第12巻)、筑摩書房、1999	918.6/Sak/12	図目集密
『火定』 澤田瞳子著、PHP研究所 (PHP 文芸文庫)、2017		所蔵せず
※ 『隔離の島』 ル・クレジオ著、中地義和訳、筑摩書房、2013	953.7/Lec	図目集密
『ナナ』 エミール・ゾラ著、川口篤、古賀照一訳 (世界文学全集19)、新潮社、1961	908/Sek/19	図目集密
『危険な関係』 ビエール・ショアルロ・ド・ラクロ著、竹村猛訳、角川書店、2004	953/Lac	図目
※ 『レディ・エレアノアのmant』 ナサニエル・ホーソーン著、國重純二訳 (ナサニエル・ホーソーン短編全集 第2巻)、南雲堂、1994	933/Haw/2	図目集密

スペイン風邪

※ 『流行感冒』 (志賀直哉全集 第3巻)、岩波書店、1999	918.3/Shi/3	図目集密
※ 『マスク』 (菊池寛全集 第3巻)、岩波書店、1938	918.6/Kik/3	図目集密
『愛と死』 武者小路実篤著 (武者小路実篤全集 第5巻)、新潮社、1955	918.6/Mus/5	図目集密
『伸子』 宮本百合子著 (宮本百合子全集 第3巻)、河出書房、1952	918.6/Miy/3	図目集密

架空の病

※ 『Eイン博士の最後の飛行』 ジェイムズ・ティプトリー・J r. 著、伊藤典夫訳 (愛はさだめ、さだめは死) 早川書房、1987	933.7/Tip	図目
※ 『白の闇』 ジョゼ・サラマーゴ著、雨沢泰訳、日本放送出版協会、2008	969/Sar	図目集密
※ 『赤死病の仮面』 E.A. ボー著、松村達雄訳 (ボオ全集 第2巻)、東京創元社、1963	938.68/Poe/2	図目集密
『復活の日』 小松左京著、早川書房 (ハヤカワ文庫)、1974		所蔵せず
『鹿の王』 上・下 上橋菜穂子著、角川書店、2014	913.6/Ueh/1,2	図目

「図目集密」→地下1階集密書架内に配架、「図目」→各階固定書架に配架、「西保存書庫」→西生田保存書庫にあり、取り寄せ可能

カウンターでよくある質問—新学期編—



4月に入学された新入生の皆さんもそろそろ大学生活にも慣れ、図書館を利用することも増えてきたのではないのでしょうか？図書館カウンターでよく聞かれる質問をご紹介します。

【Q1】 資料の探し方がわかりません。

- A. 図書館 HP の [OPAC] から、資料名やキーワードを入力して検索できます。
配置場所と請求記号欄を控え、配置場所階数一覧表（図書館内 OPAC 検索用パソコンに掲示あり）を参照しながらフロアを確認してください。各書架の側面の見出しを確認の上、該当の書架に請求記号順に並んでいる資料を出納してください。

【Q2】 資料の取り寄せ依頼をしましたが、到着の連絡がきません。

- A. 図書資料到着時には、MyJWULIS に登録されたメールアドレスへ自動メールが送信されます。MyJWULIS に登録がなければ、メールの送信はされませんので必ずご登録ください (MyJWULIS ログイン後、一番下「利用者情報の確認・修正」から登録可能)。また、雑誌の取り寄せについては、受付時にお渡しする控えに記載の到着予定日を、ご自身でご確認ください。

【Q3】 MyJWULIS から図書の貸出更新をしようとしたのですが、できません。

- A. MyJWULIS からの貸出更新を既に1回行っている場合、延長したい図書に予約がついている場合、持っている図書の返却期限が過ぎている場合、貸出停止の罰則期間中の場合は貸出更新できません。その他、貸出規則上一部の図書の貸出更新ができない期間もあります。図書館開館カレンダーにてお知らせしていますので、ご確認ください。

【Q4】 借りた図書を複数人で共有して使いたいです。

- A. 借りた本人と一緒に図書を使うことは構いませんが、借りた本人以外が図書を持ち帰ることは禁止されています。借りた本人以外が図書を持ち帰り、返却期限を過ぎたり、資料を汚したりした場合は、すべて利用カードでその資料を借りた人の責任となります。

【Q5】 Q. 館内で飲食できる場所がありますか

- A. 図書館内は飲食禁止です。ペットボトル・水筒のみ持込可ですが、飲むとき以外は必ず鞆の中にしまってください。害虫の発生、資料の汚れやパソコン故障の原因となり、弁償となる場合もあります。

【Q6】 図書館は誰でも入ることができますか？

- A. 当館は一般公開されていませんので、利用資格のない方は入館できません。

【Q7】 図書館内で利用できる個室はありますか？

- A. 図書館の資料を利用して学修する場所として、3名以上から利用できる「グループ研究室」が3部屋あります。学習施設のため、対面・オンライン共に面接や打ち合わせの場所として利用はできません。なお、2階「JWU ラーニング・コモンズさくら」は個室ではありませんが、声を出して学修することが可能です。

(閲覧係)



